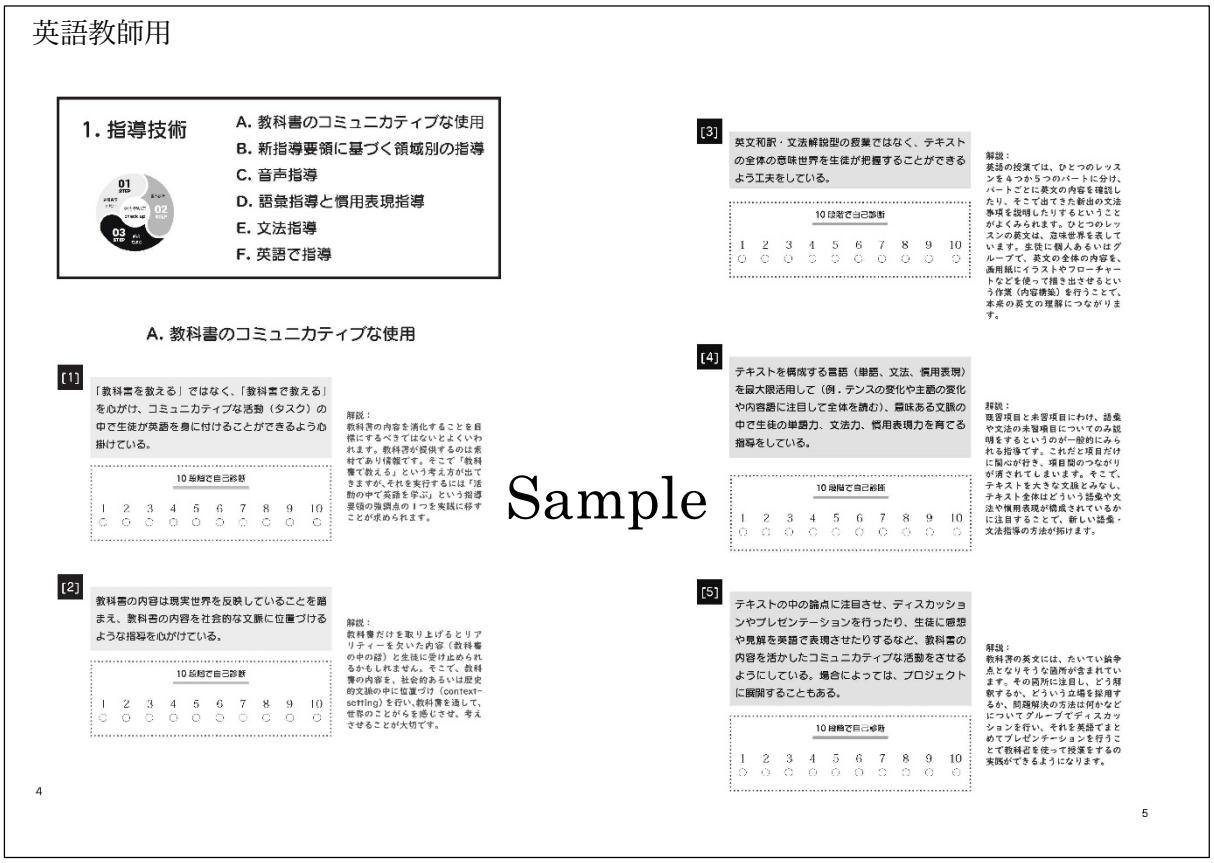
評価システムの支援

自己評価のための評価システムとして、英語教師用と生徒用を作成しています。以下は、その一部を示しています。

英語教師用



1. 指導技術

A. 教科書のコミュニカティブな使用
B. 新指導要領に基づく領域別の指導
C. 音声指導
D. 語彙指導と慣用表現指導
E. 文法指導
F. 英語で指導

A. 教科書のコミュニカティブな使用

[1] 「教科書を教える」ではなく、「教科書で教える」を心がけ、コミュニカティブな活動（タスク）の中で生徒が英語を身に付けることができるよう心掛けている。

10段階で自己診断
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

解説：教科書の内容を消化することを目標にするべきではないとよくいわれます。教科書が提供するのは素材であり情報です。そこで「教科書で教える」という考え方が出てきますが、それを実行するには「活動の中で英語を学ぶ」という指導要領の強調点の１つを実践に移すことが求められます。

[2] 教科書の内容は現実世界を反映していることを踏まえ、教科書の内容を社会的な文脈に位置づけるような指導を心がけている。

10段階で自己診断
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

解説：教科書だけを取り上げるとリアリティーを欠いた内容（教科書の中の話）と生徒に受け止められるかもしれません。そこで、教科書の内容を、社会的あるいは歴史的文脈の中に位置づけ（context-setting）を行い、教科書を通して、世界のことがらを感じさせ、考えさせることが大切です。

4

[3] 英文和訳・文法解説型の授業ではなく、テキストの全体の意味世界を生徒が把握することができるよう工夫をしている。

10段階で自己診断
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

解説：英語の授業では、ひとつのレッスンを４つか５つのパートに分け、パートごとに英文の内容を確認したり、そこで出てきた新出の文法事項を説明したりするということがよくみられます。ひとつのレッスンの英文は、意味世界を表しています。生徒に個人あるいはグループで、英文の全体の内容を、画用紙にイラストやフローチャートなどを使って描き出させるという作業（内容構築）を行うことで、本来の英文の理解につながります。

[4] テキストを構成する言語（単語、文法、慣用表現）を最大限活用して（例．テンスの変化や主語の変化や内容語に注目して全体を読む）、意味ある文脈の中で生徒の単語力、文法力、慣用表現力を育てる指導をしている。

10段階で自己診断
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

解説：既習項目と未習項目にわけ、語彙や文法の未習項目についてのみ説明をするというのが一般的にみられる指導です。これだと項目だけに関心が行き、項目間のつながりが消されてしまいます。そこで、テキストを大きな文脈とみなし、テキスト全体はどういう語彙や文法や慣用表現が構成されているかに注目することで、新しい語彙・文法指導の方法が拓けます。

[5] テキストの中の論点に注目させ、ディスカッションやプレゼンテーションを行ったり、生徒に感想や見解を英語で表現させたりするなど、教科書の内容を活かしたコミュニカティブな活動をさせるようにしている。場合によっては、プロジェクトに展開することもある。

10段階で自己診断
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

解説：教科書の英文には、たいてい論争点となりそうな箇所が含まれています。その箇所に注目し、どう解釈するか、どういう立場を採用するか、問題解決の方法は何かなどについてグループでディスカッションを行い、それを英語でまとめてプレゼンテーションを行うことで教科書を使って授業をするの実践ができるようになります。

5

Sample

生徒用

英語学習者の一般的な英語力を測定する方法としては、GTEC、TOEFL、TEAP、英検、IELTS、TOEIC をはじめ数多くのテストが存在します。しかし、英語学習者の立場からすると、これらのテストで何点とか何級という結果だけでなく、総合的な観点から自分の英語力の立ち位置――どこが強く、どこが弱いかの全体像――を知ることが、学習上大切な指標になるはずです。そこで必要となるのが、学習者が自分の英語力を多面的に自己評価することができる仕組みです。

そこで、学習者が自らの英語力を自己評価するための問診票を開発しました。内容的には、以下の９つの観点から７２項目の設問を設けています。

1. 心理的要因（7 項目）
2. 母語の影響（5 項目）
3. 英語の基本的な知識（7 項目）
4. 英語の運用能力（20 項目）
5. コミュニケーション方略（9 項目）
6. 発音力（4 項目）
7. 語彙力（4 項目）
8. 文法力（11 項目）
9. 学習に対する態度（5 項目）

ここで取り上げた設問の多くは、第二言語習得研究の知見を反映させる形で作成したものです。1 年に 1 度あるいは 2 度、自己評価することを勧めます。以下は「心理的な要因」に含まれる項目の例です。

①【心理的な要因】

ネイティブと話していても、緊張することはない。

No　1　2　3　4　5　6　7　Yes

2. 英語で自分の思いを積極的に表現したいと思う。

No　1　2　3　4　5　6　7　Yes

3. 英語で話すことは楽しい。

Sample

No　1　2　3　4　5　6　7　Yes

4. 英語を話す機会があれば、いつでも進んで話してみたいと思う。

No　1　2　3　4　5　6　7　Yes